スポーツ文化：身体運動と文化に関する基礎的研究

2022年の諏訪御柱祭開催に向けて：コロナ禍における状況の中で

飯田 義明（経済学部教授）

はじめに．

長野県諏訪市で寅申の年の７年に１度に開催される式年造営御柱大祭（以下、大祭）をフィールドとしている筆者にとって、本年度は様々な調査を中止せざる負えない残念な状況であった。前回の大祭は’16年（平成28年）であり、その２年前から諏訪の方々にお世話になり調査を継続している。次の開催は’22年（令和4年）の4、5月である。毎回、大祭の準備は約１年半をかけて区、地区、ブロックで調整が行われる（小西ほか，2019）。そのため、’20、’21年度は次の開催に向けて様々な行事、運営会議を開催していかなければならない大切な期間である。本稿では、筆者の調査フィールドである茅野市湖東村（上社）の関係者への聞き取り調査、電話等での遣り取りから現在の動向がどのようになっているのか報告をする。

写真1　2015年7月筆者撮影

写真2　2016年2月筆者撮影

1. 大祭に向けての祭事

大祭の開催に向けて、その２年ほど前から様々な祭事が行われる。特に柱に関する祭事としては、’20年９月に「仮見立て」、‘21年６月には「本見立て」（写真１）、’22年３月に「伐採」が行われる。この柱を決めることは、その回の御柱を決定することであり、氏子（氏子とは神社周辺の一定地域に住む人々である）たちにとっては非常な重要な祭事である。そして４月２-４日に「山出し」、５月２-４日が「里曳き」、そして建て御柱となる。これ以外にも、上社では’22年２月に８本の御柱をどのブロックが曳行するのかを決める「御柱抽籤式」が行われる（写真２）。これらの御柱に関する祭事以外にも各地区、区で様々な祭事、集まり（打合せ・縄打ち等）、それらの後に必ず行われる直会（なおらい）などが催される。写真からも明らかなように、様々な祭事では多くの人々が集合することとなる。本来、上記のような祭事でのコミュニケーションを通して地区の統合力を高める側面がある（飯田，2018b）。しかし、コロナ禍で密になることを避けなければならないため、今後どのように進めていくか頭を抱えている状況である。

今回、聞き取りから明らかになっていることは、上社では「仮見立て」が中止になっているそうである（ちなみに、下社では「仮見立て」「本見立て」が中止になっている）。「本見立て」では、写真１にもあるよう数十名の氏子も参加することから、中止にするか最小限の役員のみで行うかを検討中とのことである。

2. 諏訪大社と氏子の関係性

大祭を開催するにあたり、祭りを運営するのは地域の氏子たちである。運営組織は、責任役員（大総代７名）、大総代会（31名の各地区から選出された大総代）、各部落から選出された御頭郷（≒氏子総代）、区長、氏子が大総代会を頂点としたピラミッド型で構成されている。そして、諏訪大社（以下、大社）と大総代会（責任役員を含む）で御柱祭協議会（以下、協議会）が開催され、前回の問題点などを含め協議をしつつその回の大祭に関して詳細な取り決め

をしている。その一方で大社と氏子の関係は、大祭を含めて様々な祭事はあくまでも氏子の奉仕という立場である。

現段階でも協議会は開催されているが、大社側の対応はあくまでも氏子の奉仕であるとの姿勢を堅持しており、どのように開催するかは氏子側に任されているようである。ただし、次に見るように氏子の運営組織が歴史的に複雑であるという背景もあり（小西ほか，2018）意見がなかなかまとまらないようである。

３．複雑な組織による調整の困難さ

上社地区では本宮と前宮の２つの社に計８本の柱を曳行することになる。この曳行される柱は、‘22年の２月に「御柱抽籤式」にて決定される。図1に示されるように運営組織は８つのブロックに各地区が組み合わされ構成されているが、ブロックの下にも地区・各区が組み合わされた非常に複雑に入り組んだ重層構造になっているのである。これまでは、先の協議会での決定事項が各ブロック、地区、区に降りていき各段階での調整を経て意思統一が図られ運営されていく。この流れは組織図的には上からの一方向性のように見えるが、実際には各段階における調整に約1年半の時間がかけられているのである（小西ほか，2019）。つまり、最終的に綱を曳き、柱を建てるのは氏子たちである。そのため、意見調整に齟齬や不満があると「山出し」「里曳き」で柱が動かなくなってしまうのである（飯田，2018a）。今回は、大社との間での未決定事項が多く方向性が定まっていないため、各ブロック、地区、区でもどのように対応するかの協議が滞っているようである。

４．さいごに：コロナ禍の現状で

大総代会では、中止も視野に入れて検討をしているとも漏れ伝わってきている。その一方で、それでも氏子としては、「御柱は建て替えなければならない」という意見も出ているという。その場合、柱を曳行できないとするとトレーラーで運ぶのか、柱を小さくするのかなど、苦渋の選択を含めた議論がされているようである。これまで約1200年に渡り、一度となく中止されたことがないと言われる大祭である。今後どのようにコロナ禍に対応し運営がされていくのか、またこのことが氏子たちにどのような影響を与えるのか、’21年からの１年間は大変な年になると思われるが、氏子たちとともに見届けていきたい。

参考文献

小西恵美・樋口博美(2018)
御柱祭を成立させる地域的構成の単位とその歴史的変遷 -茅野市湖東地区の事例-. 専修大学人文科学研究所月報,第292号,pp.29-49

小西恵美・樋口博美・飯田義明(2019)
諏訪柱祭にみる地域協働御のなかの統合と運営 -上社湖東地区の慣例と創出のしくみ-. 専修大学人文科学研究所月報,第299号,pp.1-35

飯田義明(2018b)
平成28年諏訪大社式年造営御柱大宮後に開催される小宮祭における調査報告 -上社小東地区における須栗平を事例として-. 専修大学スポーツ研究所紀要41, pp.21-33

飯田義明(2018a)
式年造営御柱大祭における目処梃子に乗ること -御柱曳行を支える身体の協動性に着目して- ,第23回身体運動文化学会抄録.

付記：本研究の一部は令和２年度スポーツ研究所助成（調査研究費：スポーツ文化部門）を受けたものである

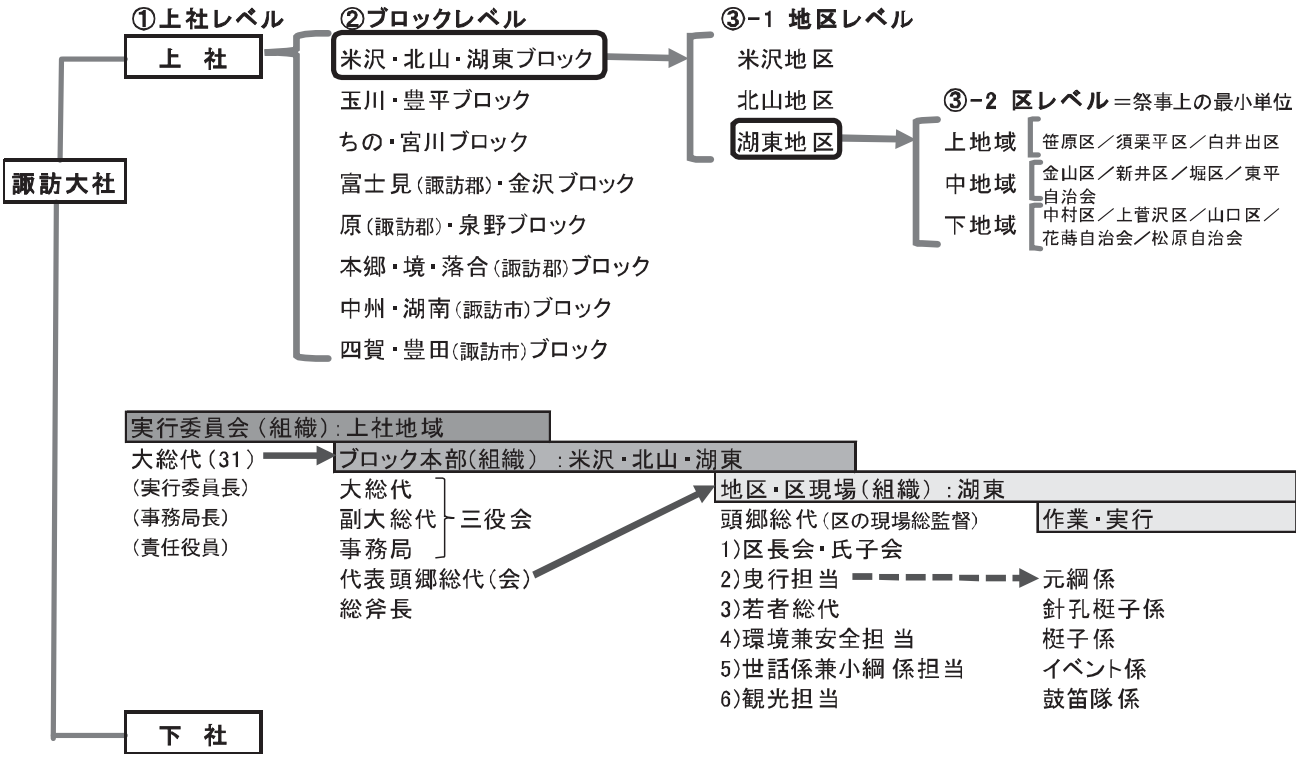

図1.御柱祭を構成する３つの組織レベル（2019 小西ほか）